

昨年、大学の獣医学生達が、視察、勉強の為、アークを訪れてくれました。積極的に動物福祉を考えて行こうとする、将来の獣医さん達がこのような、自発的な勉強会を開く。その事実、動物の将来への希望を見出した思いです。以下は、その後の感想を一部抜粋したものです。

日本のペット事情の普段見えないようなところを知ることが出来るとも勉強になりました。とても楽観できるような状態ではないけれど、少しでもペット達の状況が良くなるように考えていきたいです。(1年生)

初めてシェルターというものを実際に見ました。思ったことを正直にかきます。300頭の犬、200匹のネコがいて、そのすべてに平等に幸せに生きる権利が存在していたことに本当に驚いたし、何より、シェルターで働いている人に尊敬の気持ちでいっぱいになりました。人が必要としてつくったペット、家畜、実験動物などはその生活環境や運命が人の手にゆだねられています。人がつくったのだから、人の勝手にふりまわしていいなんてもってのほかで、むしろだからこそ、その命に感謝し、できる限りの幸せを保証すべきだと思います。人の都合に振り回された犬猫に幸せな環境を保証してあげる。それがシェルターの役割であるならシェルターでの過ごし方はもちろん幸せでなくては意味がないと思います。ARKではそのための努力がとても感じられてとてもすごいことだとも思いました。動物を飼育するということは生半可な努力ではいけないんだと痛感しました。その動物の習性、性格、適切な環境を提供しなくてはならないことを改めて感じ、学校の現状のひどさに心苦しくなりました。また、

オリバーさんとのお話ではペットとしてつくられた命の悲しい現状と動物福祉の点で遅れている日本という国に悲しくなりました。私はこの現実を何とか変えたいし、そのために多くの人にもっと気付いて考えてほしいと切に思いました。改めて人の手にゆだねられた実験動物や家畜、ペットへの福祉を推進したいと思いました。(4年生)

ARKにいる犬には雑種が多いのが目につきました。日本人は血統書にこだわるという話では、自分を含めて考えさせられるものを感じました。「いのち」をブランド品か何かと同じにしている点を見つめなおすことにします。(1年生)

まずスケールが大きくてびっくりしました。ARKでは、トリマーさんもうらっしゃり、動物達の手入れが行き届いていることを強く感じました。また、スタッフの方が1匹1匹に対して愛情を持って接していらっしゃる。ことが伝わって来ました。オリバーさんの話から、日本でもイギリスのように、ペットショップで動物を買うのではなく、フリーダーから買う形にするべきだと思いました。さらに、日本にももっとシェルターが増えて、ペットを飼う時にはシェルターから里子として引き取る形が定着すればよいと思いました。(4年生)

ARKで何度かボランティアとして仕事をさせていただいて、様々な経験をしました。犬を逃がしてしまったこともあったし、治療の見込めない犬猫が安楽死となったことも何度かありました。毎日の仕事は散歩に明け暮れていますが、本当に楽しいことから悲しいことまで、色々なことがあります。何度か

行くうちに、動物の個性が分かってきて、私を覚えてくれている犬もいるようになりました。それぞれの性格やしぐさがいいとおしくて、離れたくない気持ちでいっぱいになりました。

オリバーさんは安楽死に対して大変確立された考えをお持ちです。情にもろい(?)日本人には抵抗があることも多いでしょうが、私はオリバーさんの考えに同意します。「動物は自殺しないから、どんな状況でも生きたいと思っている。」という考え方があります。しかしこれは間違っていると思います。犬や猫は、人間と暮らす為に野生動物を人間が家畜化したものであり、どのように生きるか、死ぬかは人間によってコントロールされるべきものだと思うからです。そのために人間は大変大きな責任を負わなければなりません。これは人間としての義務であり、その為にできるだけの努力をしなければならないのです。安易な「安楽死反対」はこの義務から逃げるのだと思います。獣医師という職業を目指す以上、人一倍動物に対する人間の義務を果たしたい、果たさなければならないと思いました。

オリバーさんの話の中で、日本のシェルターの少なさと共に言われたのが、避妊、去勢手術が高価なことと、その技術の未熟さでした。去勢手術を1匹45秒でするアメリカの獣医さんの話に、私は興味を持ちました。技術の向上と、新たな方法の模索によって、避妊と去勢のコストダウンを実現し、捨て犬、捨て猫と野良犬、野良猫の減少、撲滅を成し遂げたいと思いました。私の目標は、近い将来ARKで避妊、去勢手術をすることです。

(4年生)

陽気で、やさしく、元気いっぱい、時には、けんかをしかけたり——ケリーは生きる喜びにあふれていました。もとはと言えば、川岸で飢死しかけていたあわれな野良犬。もしも、あのとき助けられなかったら……保健所のガス室に送られるか、殺されずとも、一生鎖につながれる運命が待っていたはず。ところが、彼女はアークにやって来て、ここで暮らすようになったのです——毎日のお散歩や山遊び、おいしい食事に恵まれ、大勢の仲間とやさしい人たちと一緒に。でも、今はもう彼女の姿はありません。



Cheerful, bouncy, affectionate, sometimes feisty, Kerry loved life. Found wandering, abandoned and starving on a river bank, her life may have ended in a hokensho gas chamber or condemned to a life sentence on a chain. Instead she came to ARK and made her home here, with daily walks, romps in the mountain, good food, the companionship of doggie friends and people who loved her. We all miss her.

ケリーがアークにやって来たのは1991年10月10日、年齢は2歳くらいでした。12年の歳月が流れ……ガンの宣告を受けた彼女は、2004年1月18日、安らかな眠りにつきました——皆に惜しまれながら。

Kerry came to ARK on 10th October 1991, aged around two, she was put to sleep on 18th January 2004 after being diagnosed with cancer.